

第3回教員の多忙化対策検討委員会 あいさつ

皆さん、こんにちは。本日は、年度末のたいへん忙しい中をご出席いただき、ありがとうございます。第3回目となる今回の委員会は、これまでの取組を受け、今後の4年間の新たな取組方針についてご検討いただきたいと考えております。

さて多忙な仕事というのは世の中にたくさんあります。多忙であるのは打ち込むべき仕事があることで、「それが何か問題でも？」と言ってのけてみたくなる時もあります。多忙であるがゆえに適度に気が紛れて困難な局面をいつの間にか切り抜けていた、ということもあります。そのこと自体に忙しい状態というのは、何か充実した感じが本来はある、のではないのでしょうか。

私たちが避けたいのは、「こんなことをしてられない」と感じながら働く忙しさだと思います。多忙化対策とは、そうならないような対策を考えることだと思います。そういう忙しさの中にいると、どこか人を寄せ付けない雰囲気、子どもからすれば何となく相談しにくい雰囲気になりやすいと思います。しかし「こんなことをしてられない」と感じるときの、その「こんなこと」を学校での毎日の仕事の中に見分けるのが難しいところにこの対策の難しさがあります。

たとえば登校指導ですが、朝校門から出て子どもたちを迎え、その様々な表情に接すると、それぞれの家庭から送り出された子どもを学校で預かっているんだ、という責任感が自然に生まれます。また放課後のグラウンドや体育館で部活動に打ち込む子どもの中に、授業中の半分寝てしまったような無表情とは全く違う澆刺とした実にいい表情を見せている子どもがいて驚くことがあります。様々な活動の中で、ある特定の状況における様子を見てその子どものことをわかったつもりになってはいけないという当たり前のことを実感させてくれます。

多忙には充実した感じがある、と申し上げました。確かに適度に多忙なら仕事や生活に張りが生まれるのですが、過度な多忙はいけません。しかしその適度と過度の間に適切に線引きをするのは困難です。そこに多忙化対策の限界があり、働き方改革という言葉が使われるようになったのだと私は勝手に思っています。

この言葉には、組織として進める改革という意味とともに、一人一人が自らの働き方を振り返ってほしいという願いが込められていると思います。それは自分の勤務時間を区分けして、その中から不必要な部分を取り除く、ということではなくて、教員としての自分のありようをつぶさに点検し、その過程を通じて教員としての自己の崇高な使命を深く自覚し直すことだと思います。

最後の委員会にあたり、本音で長々とごあいさつを申し上げてしまいました。学校も含めて社会で働く私たちは一人一人が様々な働き方をしています。労働の捉え方、教育に対する考え方が異なるだけでなく人生観、そして人間観も各々異なります。様々なご意見をいただければ幸いです。よろしく願いいたします。